

令和7年度霞ヶ浦学講座「霞ヶ浦の古墳とカキ化石床」実施結果

実施日時：令和7年12月6日（土）9:00-12:30

場所：富士見塚古墳公園（かすみがうら市柏崎1555-3）

かすみがうら市歴史博物館別館

崎浜横穴群・カキ化石床（かすみがうら市）

参加者数：13名（内小学生～高校生 7名）

内容：古墳見学、崎浜横穴群見学

講師・案内：大久保隆史氏（かすみがうら市歴史博物館）

実施概要

かすみがうら市歴史博物館大久保隆史氏を講師に迎え、富士見塚古墳（前方後円墳、円墳など）および崎浜横穴古墳群の見学を行いました。

富士見塚古墳では、なぜその地に古墳が築かれたのか、形状や埴輪について説明を受けました。

崎浜横穴群では、茨城県南地方では少ないとされる横穴古墳の特徴、カキ化石床など当時の環境について学びました。

1) 富士見塚古墳群（かすみがうら市柏崎地区）について

富士見塚古墳は、前方後円墳と円墳からなる古墳群です。前方後円墳は、かすみがうら市内で最大規模になります。全長80mを誇ります。

特徴的な出土品として、埴輪が挙げられます。円筒埴輪には様々な模様が描かれており、舟を書いたものも見られます。また、人物、動物（馬、鹿、猿、犬）・家など多様な種類の埴輪がみつかっています。



埋葬施設は2か所あり、1か所は後円部、もう1か所はくびれ部に位置しています。（左側の写真）



霞ヶ浦が近くにあり、当時は霞ヶ浦が流通の拠点だったといえます。

この場所は霞ヶ浦からも目立ち、ランドマーク的な存在でした。

2) 塙輪と粘土について

霞ヶ浦周辺には花崗岩が広く分布しています。現在でも真壁石や稻田石が産出され、多くの建築物などに利用されています。

この花崗岩は、風化しやすく時間の経過とともに、砕けて真砂（まさ）になります。この真砂の中の細かい粒と水が混ざることにより粘土がつくられます。霞ヶ浦や筑波山流域は良い粘土が取れる土地柄です。この粘土を使って、埴輪や、古代には瓦などが作られていました。縄文土器の粘土に含まれている鉱物を観察すると、どこの粘土を使って作られたかがわかります。筑波山周辺の土器には「雲母」が含まれています。



3) 崎浜横穴群・カキ化石床（かすみがうら市加茂地区・崎浜）の見学

約 13 万年前、泥の中に生息していたカキは安定した地盤を求め、自らカキのコロニー（カキの島）を作りました。近くを流れる川尻川の川底からもカキ化石が見つかっていることから、カキの島はかなり広く広がっていると推測できます。



古墳時代の終わりごろから、古墳は小型化し、大化の改新によってその傾向が制度化されました。

茨城県では、県北には横穴墓が多く見られますが、県南地域では少ないです。また、化石床の中につくられているのも珍しいです。

横穴墓は、17基あります。県道の工事のため墓道（遺体を安置する部屋「玄室」への通路）が破壊され、玄室が露出しているものもあります。屍床（玄室の中の遺体を安置するところ）が一段高く造られており、この特徴のある横穴墓は、茨城県内ではかすみがうら市内でのみ確認されています。また屍床の数も一つの横穴墓につき1か所から3か所造られているなど、様々な形状が確認できます。



(文責 小川)